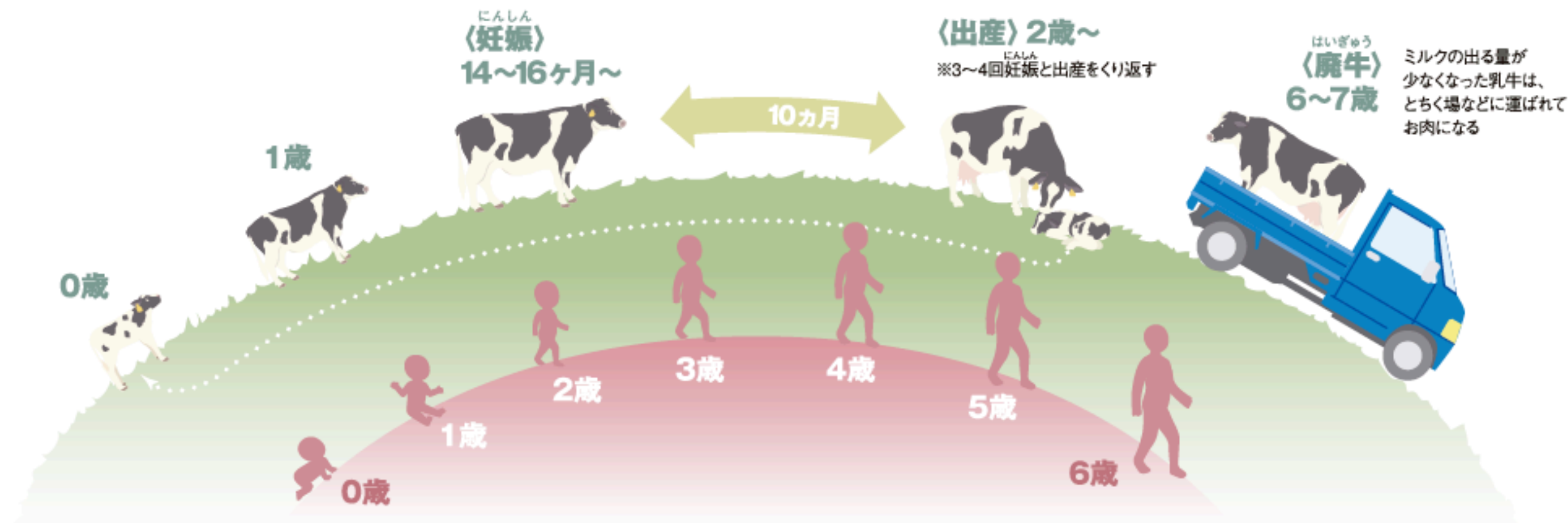


# 乳牛の成長といのちの連鎖

理科 Science

子牛は約40kgの大きさで生まれ、家畜として生きていきます。家畜とは、乳牛のようにミルクや肉を人間が利用するために飼育される動物のことで、人間のためにたくさんミルクを出し、ミルクが出なくなると、肉牛として利用されます。乳牛のうちめす牛の多くは、妊娠と出産をくり返しながらかるミルクを生産し、6~7年でその役目を終えます。



人間の子どもは、歩くまでに約1年かかりますが、子牛は生まれてすぐに立ち上がり、歩くことができます。生まれてしばらくは、ミルクを飲んで成長しますが、2ヶ月で離乳し、成牛(大人の牛)とほぼ同じえさを食べるようになります。めすの乳牛は人間とちがい、一般に生まれて14~16ヶ月で最初の妊娠をし、約280日の妊娠期間をへて子牛を生みます。約2歳ですでに母牛になり、ミルクを出すようになります。その後3~4回子牛を生み、人間の子どもだと、やっと小学校に上がる6~7歳で、ミルクを出す役目を終え、肉牛として利用されます。もちろん、生まれた子牛も同じいのちのサイクルをくり返し母牛になり、またその子牛に、いのちの連鎖を続けていきます。



## おす牛が生まれたらどうなるの？

子牛がめす牛の場合は、ミルクをたくさん出せるように、牧場で大切に育てられます。それでは、おす牛の場合はどうなるのでしょうか。おす牛はミルクを出すことができないので、子牛のときから肉牛として育てられ、生後19~21ヵ月したら売られていきます。そして、ビーフカレーの材料や、焼肉などの牛肉として、人間に利用されます。

